

体系的なピア・サポート活動による学生の学びと成長

泉谷 道子*, 山田 剛史

(愛媛大学 教育・学生支援機構 教育企画室)

(*現所属：松山大学 学生支援室)

Student Learning and Development through Organized Peer Support Program

Michiko IZUMITANI, Tsuyoshi YAMADA

Office for Educational Planning and Research, Ehime University

1. 問題と目的

本稿の目的は、体系的なピア・サポート活動が、学生の学びと成長、また、大学生生活の質向上にどのような効果をもたらしているかについて明らかにするものである。

近年、進行するグローバリゼーションや大学のユニバーサル化などを背景に、「ティーチング」から「ラーニング」へ、「教員中心」から「学生中心」へ、「何を教えるか」から「何ができるようになるか」など、学士課程のパラダイムシフトが求められている(清水, 2012)。そのような中、正課教育のみならず正課外活動も含めた学士課程教育全体で学生の成長を促すことの重要性も指摘されている(山田, 2012)。学生支援活動も、「従来型」と言われる相談や生活支援等の学生の困難さや課題を解決するものから、学生をコミュニティ形成に活用する学生FDやピア・サポート等の「学生の人的成長や大学の社会的機能を促進する学生支援」まで広範化・多様化・複雑化していると言われる(川島, 2010)。特にピア・サポートは、その実施領域が学習サポート、生活支援、コミュニティ形成、履修相談など多岐に渡っており、尚かつ、その取組みは急速に広がっている¹⁾。また、近年ピア・サポートは、学生を「学生を取り巻く問題を軽減するための労働力」として利用する取組みとしてではなく、「学生支援の取組みや正課教育・正課外の諸活動、さらには大学教育の運営に参画させ、彼らのモチベーションや学習に取り組む積極的な態度を、その相互作用の中で高めていこうとする試み」(山田, 2010)として期待されており、学生の汎用的技能や態度・志向性の涵養など、学びと成長の機会として注目される中、今後

も更なる普及が予測されている(小貫, 2011)。

愛媛大学においては、過去10年間に渡り、教学改革の一環として、学生支援活動を、幅を広げながら積極的に展開してきた。また、2012年7月には、「正課教育、準正課教育、正課外活動、学生支援等を通して総合的に培われる能力」として「愛媛大学学生として期待される能力-愛大学生コンピテンシー」(以下、愛大学生コンピテンシー)を策定し、今後、教育改革の戦略策定や、教学支援活動の指標として用いることも視野に入れている(表1)。

ここに示される「準正課教育」とは、「卒業要件に含まれない、あるいは単位付与を行わないが、愛媛大学の教育戦略と教育的意図に基づいて教職員が関与・支援する教育活動や学生支援活動」であり、留学、就職セミナー、スタディスキル講座等と並んで、ピア・サポート活動もここに位置づけられている。これらのピア・サポート活動は、学習支援、生活支援、人間力育成まで多岐に渡るが、大きな特徴は、これらの活動の運営責任主体がFD/SD事業を担う教育企画室であり、「学生の能力開発」の一環として教職員が関与している点である。

愛媛大学の他にも、新潟大学、立命館大学、関西大学、香川大学など、学生支援を教育の柱の一つとして捉え、ピア・サポート活動の実施体制や環境を整備する取組は広がっている。そのような中、ピア・サポート活動の教育的効果について明らかにすることを試みる調査研究も増え、ピア・サポート活動が学生の認知的・人格的な発達に寄与することが少しずつ明らかとなっている(次節参照)。しかし、日本における大学生のピア・サポート活動参加が、大学生生活全体の質向上にどのような効果をもたらしている

表1 愛媛大学学生として期待される能力～愛大学生コンピテンシー～

5つの能力	12の具体的な力	例示
I. 知識や技能を適切に運用する能力	1. 必要な情報を収集・整理できる 2. 個別の知識や技能を相互に関連づけながら習得できる 3. 習得した知識や技能を基に自分の考えを組み立て、適切に表現(記述・口述)できる	
II. 論理的に思考し判断する能力	4. 広い視野と論理的思考に基づき分析・解釈できる 5. 科学的根拠に基づき判断し、解決策を提示できる	クリティカル・シンキング/創造的思考 意思決定・判断力/課題探求・発見・解決力
III. 多様な人とコミュニケーションする能力	6. 様々な状況に応じて適切な対話・討論ができる 7. 目的達成のために多様な人と協働できる	ダイアログ/ディスカッション/プレゼンテーション 協調性/チームワーク/リーダーシップ
IV. 自立した個人として生きていく能力	8. 自らの個性や適性を活かして行動できる 9. 社会的関係の中で自分の行動を調整できる	自己理解/自己決断/リフレクション 順応性/セルフマネジメント/規範遵守
V. 組織や社会の一員として生きていく能力	10. 他者を理解し、他者のために役立つことができる 11. 集団・組織の一員として自覚と誇りをもって行動できる 12. 地域の課題を、地球規模で考え、解決に向けて貢献できる	「お接待」の心/ホスピタリティ 責任感/連帯感/帰属意識/愛校心 社会貢献/グローバルマインド

かについての研究は、筆者の知る限りほとんど見当たらない。

本研究の目的は、愛媛大学が取り組むピア・サポート活動の1つ「スチューデント・キャンパス・ボランティア(以下、SCV)」に参加する学生が、活動を通してどのような力を身につけているのか、また活動が参加学生の大学生活の質向上とどのようにむすびついているのかについて、アンケート調査とインタビュー調査を用いて明らかにすることである。

2. ピア・サポート活動の効果

ピア・サポート活動がどのような効果をもたらすのか、まずは学生が身につけた力に着目して、以下3つの先行研究と調査を取り上げる。

一つ目は、名古屋大学が2004年より実施しているピア・サポート活動「ペア相談」の実践研究である(杉村ら, 2006)。ペア相談では、「サポーター」と呼ばれる学生同士がペアとなり、相談に訪れた学生に対しての情報共有や、心理的問題への対応までを行う。また、サポーターは相談活動の他、組織運営にも主体となって取り組む。本研究では、サポーターである学生の心理的発達について自由記述調査とメーリングリストの分析結果をもとに検討が行われているが、サポーターの「相談能力・情報提供力の増加」や主体性の高まりなどが示唆される結果が得られている。

二つ目は、立命館大学における伝統的かつ大規模な活動である「オリター・エンター活動(オリター活動)」についての実践研究である(寺本ら, 2007)。本活動では、「オリター」と呼ばれる上級生集団によって、新入生が大学に円滑に適應するための支援が行われているが、新入生だけでなく、支援する側のオリターも新入生との触れ合いを通じて学ぶ「ピア・エデュケーション」がねらいとされている。寺本らは、オリター637名に対し、オリター就任前、

就任中、終了後の三度に渡り、積極性、社会性、責任感、コミュニケーション力、プレゼンテーション力、問題解決力がどの程度向上したかについて尋ねている。6つの項目の全体平均値の就任前と終了後の比較では、499名(88.5%)の学生の数値が高くなっており、数値が低下した学生は37名(6.6%)、数値に変化の見られなかった学生は26名(4.6%)という結果が示された。

日本学生支援機構では、ピア・サポートを実施している331の高等教育機関のプログラム担当者に対してその効果を尋ねている(2010)。学生の能動的態度向上や教職員の変化など、9つの項目について4段階で回答する本調査において、90%以上の機関が「学生の能動的態度やコミュニケーション能力が高まった」に対して「強くそう思う」「ある程度そう思う」と回答している。また、「自律的な学生が増えた」についても、75%以上の機関が肯定的な回答を示している。

次に、ピア・サポート活動の大学生活全体への影響について、前述した日本学生支援機構の調査結果を再び取り上げる。まず「学内の一体感や学生の協調性が育成された」と「就職にも良い効果が期待できそうだ」に対して肯定的な回答を示す機関は70%を超えている。また、「正課の授業の成果にも良い影響が出ている」、「学習態度や基本的マナーが良くなった」に対しては、60%以上の機関が肯定的な意見を示している。

以上をまとめると、ピア・サポートが、学生の積極性やコミュニケーション能力等の汎用的技能の向上に寄与すると同時に、キャンパスにおける他の活動や学習への効果、また他学生への波及効果を生んでいる可能性が窺える。

3. 愛媛大学スチューデント・キャンパス・ボランティア (SCV)

3.1 概要

SCVは、「学習支援、生活支援、障がい学生支援、留学生支援、高校生・新入生支援活動を通して『教え合い、学び合い、助け合う』力を高めることを目的とした制度」である。平成7年に重度の聴覚障がい学生が入学したことに端を発し、平成15年に、それまで既に活動していた2つの団体に加え、新たに4つの団体が設立され、同年「SCV制度」が学長裁定で規定化された（佐藤，2012）。平成16年には、文部科学省「特色ある学生支援プログラム」に採択され、平成19年度に採択機関が終了してからは、学長裁量経費により運営されている。平成19年度以降は、登録学生が常に200名を超え、現在も9団体にて300名近くの学生が活動している（表2）。

3.2 運営・支援体制

SCV全体の運営責任主体は、教育・学生支援機構教育企画室であり、全体の支援には、学生支援センター所属の

教員1名を含む計4名が担当教員として携わる。また各団体には顧問教職員が配置されており、民間企業や行政関係者も支援員として携わっている。活動場所としては、9団体が共用する「ピア・カフェ」と呼ばれる活動スペースと、メディア・サポーター映像部にはスタジオが整備されている。また、SCV全体の統括的役割を担う学生1名が有給職員として学生支援部に所属し、連絡・調整や予算管理等を行う。

通常、活動は学生主体で進められるが、SCVの活動にふさわしいと判断した企画等を教職員が学生に提案し、共同で実施する場合もある。佐藤（2012）は、学生と教職員の関係について「教育する者・される者という関係よりは、大学の構成員として共同で課題を解決していく同志関係といった方が適切」と述べている。

SCVの活動は各団体単位で進められるが、年数回に渡り、学生主体で企画する全体での行事・研修が実施される。各研修の主な内容は以下の通りだが、担当教員はこれらについて助言を行う他、広報活動支援や、コミュニケーション力、後輩指導、新人獲得方法についてのセミナー等を担当する（表3）。

表2 SCVの団体名と活動内容

団体名	設立年度	活動内容	登録学生数 (平成24年6月現在)
愛媛大学学生メンターズ (ESMO)	2002年	新入生、高校生を対象にしたキャンパスの案内や相談窓口での対応、SCVグループ間の調整、SCV全体研修の企画・実施等	25名
国際交流コーディネーター (ICO)	2003年	インターナショナル・チャットルームの開催、学生祭でのフード・フェアでの開催、留学生歓迎会の開催等	38名
ボランティア・コーディネーター (AIVO)	2002年	学外からのボランティア情報の整理と告知、大学生向けボランティア講座の企画・運営	45名
障がい学生支援ボランティア (CBP)	1995年	聴覚障がい学生に対するノートテイク、手話通訳等	69名
メディア・サポーター映像部 (MSBT)	2004年	学内広報番組「ぞなもしライブ」の作成・配信等	12名
メディア・サポーター出版部 (MSPT)	2004年	学生向け学内広報誌「愛U」の作成、配布	17名
キャリア・サポーター (CS)	2004年	就職やキャリアに関するセミナー・イベントの開催、社会人との交流会、広報誌「キャリサポ新聞」の作成、配布	5名
図書館サポーター (LS)	2005年	開架図書の整理、推薦図書コーナー運営、広報誌「ひよこ」の作成	33名
エコキャンパス・サポーター (ECS)	2008年	学内環境整備、環境啓発イベントの企画・実施	33名

佐藤（2012）を一部筆者が修正

表3 SCV全体行事・研修

実施時期	行事・研修名	研修内容
4月	「合同説明会」	新入生に向けた活動説明会
6月	「6月研修」	SCV概要説明、各団体のミッション・バリューの設定、年度目標設定、コミュニケーション力トレーニング等
11月頃	「秋研修」	他大学のピア・サポート団体等との交流、合同研修
2月	「2月研修」	新人獲得・後輩指導方法研修、年度目標評価、ポートフォリオ作成等

4. 結果と考察

4.1 SCV 活動についてのアンケート調査

(1) 調査概要

目的

SCV の活動を通じてどのような力を身につけることができているのか、SCV での活動は学生生活全体とどのように結びついているのかについて明らかにすることを目的とする。

調査対象者

SCV に所属する学生124名 (内訳: 1 回生31名, 2 回生44名, 3 回生44名, 4 回生 5 名)

調査時期

2012年 2月～5月

調査内容

1. 属性 (所属団体, 回生, 役割)
2. 1 年間の SCV の活動に対する満足度 (4 件法)
3. 1 年間の SCV の活動に対する関与度 (4 件法)
4. 活動を通じて学んだこと (5 項目各 4 件法)
5. 活動を通じて得た力 (7 項目各 4 件法)

ここでは、2012年 7月に策定された「愛大学生コンピテンシー」(5つの能力12の力)のうち、SCV の活動と関連性が高いと思われる項目を7つ選出し、それぞれどの程度身についたか(「身につけることができた」～「身につけることができなかった」の4段階)を問うている。

6. 総合的な学生生活満足度 (4 件法)
7. 現在の卒業後の進路選択意識

(2) 結果と考察

1. 活動に対する満足度

まず、1年間の SCV の活動に対する満足度について過

去3年間の比較をしたものが図1になる。概ね8割の学生が満足したと回答している。2011年は若干満足した学生の割合が減少しているが、積極的に関わった学生のうち満足したと回答した学生の割合は83.1%だったこと、活動関与度と活動満足度の間に $r = .323$ ($p < .001$) と比較的高い相関がみられたことから、満足度だけではなく個人が活動に対してどの程度積極的に関与したのかといったことも考慮する必要がある。

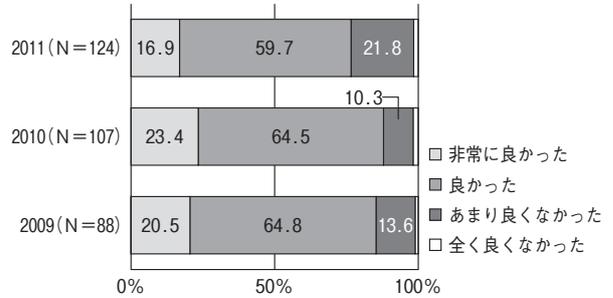


図1 SCV の活動に対する満足度 (2009-2011)

2. 活動を通じて得た力

SCV 1年間の活動を通じて得た力について、愛大学生コンピテンシー7項目の平均値で示したものが表4の通りである。まず、全体的な傾向として SCV の理念ともつながりの深い項目4「他者および集団・組織のために役立つこと」(3.10)、そして団体での活動の性質上不可避である項目2「目的の達成のために多様な人と協働すること」(3.16)の2項目が特に高い値となっている。

また、表4では学年ごとの差異についても示している。学年を独立変数、コンピテンシー項目を従属変数とした一要因分散分析を行った結果、7項目中4項目で有意差がみられた。これらについて多重比較(LSD法)を行ったところ、概ね1, 2回生より3, 4回生が高くなっていること、特に2回生が相対的に低くなっている。SCV の活動

表4 SCV の活動を通じて得た力 (愛大学生コンピテンシー) の全体と学年差異 (N=124)

項目内容	全体	学年				F 値	多重比較 (LSD 法)
		1 (N=31)	2 (N=44)	3 (N=44)	4 (N=5)		
1. 様々な状況に応じて適切な対話・討論を行うこと	2.80 (0.69)	2.71 (0.69)	2.64 (0.72)	2.93 (0.59)	3.60 (0.55)	4.11**	1 < 4 2 < 3 < 4
2. 目的の達成のために多様な人と協働すること	3.16 (0.68)	3.10 (0.70)	2.98 (0.70)	3.36 (0.61)	3.40 (0.55)	2.79*	2 < 3
3. 地域の問題を、地球規模で考え、解決のために行動しようとする	2.24 (0.85)	2.16 (0.82)	2.05 (0.83)	2.36 (0.78)	3.40 (0.89)	4.66**	1, 2, 3 < 4
4. 他者および集団・組織のために役立つこと	3.10 (0.64)	3.00 (0.58)	3.07 (0.66)	3.18 (0.66)	3.40 (0.55)	0.90	n.s.
5. 自らの個性や適性を活かして行動すること	2.99 (0.70)	2.84 (0.58)	2.89 (0.75)	3.16 (0.69)	3.40 (0.55)	2.36†	1 < 3
6. 社会との関係の中で自分の行動を調整すること	2.77 (0.70)	2.94 (0.51)	2.59 (0.82)	2.84 (0.65)	2.80 (0.84)	1.71	n.s.
7. 愛媛大学生としての自覚と誇りを持つこと	2.87 (0.84)	2.90 (0.75)	2.77 (0.86)	2.98 (0.86)	2.60 (1.14)	0.61	n.s.

注1) 数値は平均値 (カッコ内は標準偏差), 平均値3.0以上はボールド体

注2) **p < .01 *p < .05 †p < .10

の特徴の1つとして、代表や副代表など活動の中心を2回生が担っており、この時期の活動の負荷が最も高くなっていることがあげられる。彼らは早い段階から責任を負って活動を展開することになるため、多くの失敗や挫折を経験する。そのことによって自分に様々な力が足りていないことに気づく。故に、一旦値は低くなるが、3回生以降になって責任を後輩に譲り、サポートに回ることで、一気に駆け抜けた活動を振り返ることによって力を得たことを実感する。このシステムが2回生と3回生以降の値の差を生み出していることが推察される。

3. SCVの活動と学生生活、進路選択意識との関連

SCVの活動に対する満足度と学生生活全体の満足度の関連について相関係数を求めたところ、 $r = .323 (p < .001)$ と比較的高い関連が見られた。このことから、SCVでの活動に満足していることが学生生活での満足感に少なからず影響を与えていることが推察される。

また、SCVに対する関与度と卒業後の進路選択意識との関連について見たものが表5の通りである。以下、3つの特徴を取り上げる。第1に、あまり積極的ではなかった学生の半数以上が「職種は決まっています準備を進めています」と回答している。SCVでは先述したように低年次(2回生)が中心になって活動していることや、就職活動を控えて相対的に関与度の低くなる高年次生がここに該当していることが窺われる。第2に、積極的に関与している学生の半数近くが「就職するつもりではいるが、具体的にはまだ決まっていない」と回答している。これは先述したとおり、SCVの活動の中軸となっている2回生が相当し、まだ進路選択については模索している段階にあると言える。第3に、非常に積極的に関与している学生の多くは、具体的な職種が決まっていたり、大学院進学を希望していたりしている。ここには新旧を含む各団体のリーダー層が相当し、明確な進路選択意識を有していることが窺われる。

表5 SCV関与度と進路選択意識の関係

	職種決定/ 準備	就職/ 未決	院進学	未定	合計
積極的ではない	2 (33.3)	4 (66.6)	0 (0.0)	0 (0.0)	6 (100)
あまり積極的ではない	22 (56.4)	12 (30.8)	4 (10.3)	1 (2.6)	39 (100)
積極的に関与	10 (17.9)	26 (46.4)	15 (26.8)	5 (8.9)	56 (100)
非常に積極的に関与	7 (35.0)	5 (25.0)	6 (30.0)	2 (10.0)	20 (100)
合計	41 (33.9)	47 (38.8)	25 (20.7)	8 (6.6)	121 (100)

4.2 SCV活動についてのインタビュー調査

(1) 調査概要

目的

アンケート調査で得られた知見を確認・発展させることを目的とする。

調査対象者と選抜方法

SCVに所属する学生9名(内訳:1回生4名,2回生3名,4回生2名)を対象に実施。SCV全体統括を担う学生に、学部に基づく3つのグループ(法文学部,理・工学部,教育学部)から、各学年2名ずつ(計12名)を選抜するよう依頼。選抜された11名に個別に交渉を行い、了承を得られた学生に対してインタビューを実施した。

調査時期

2012年10月

調査内容

インタビューは一人に対して30分程度実施し、1)SCVの活動を通じて身についた力、2)SCVの活動を通じて身についた力をSCV以外の場面でどのように活用しているか、3)SCVに関わったことによって大学生活がどのように変わったか、を中心に著者2名で聞き取りを行った。インタビュー内容はICレコーダーと筆記により記録された。

(2) 結果と考察

1. 身についた力

インタビュー調査において「身についた力」として複数の学生が挙げたものに、「多様な他者と関わる力」と「目的・目標および団体のミッションに基づいた行動」の2つがある。

まず多様な他者と関わる力については、MSBTに所属する男子学生(2回生)が、「取材で学生以外の人と関わる機会が多いので、特に年上の人とのコミュニケーション能力が身についた」と述べている。また別の男子学生(4回生)は、「入学当初はピア・カフェ(SCVの活動場所)に行くのも怖いくらいだったが、1回生の終わりには毎日通い、先輩に質問もできるようになった。SCVでの活動がなければ今の自分のコミュニケーション力は無い」と述べている。別の女子学生(2回生)は、「研修等で他団体の学生との関わりや教職員との関わりも多いので、物怖じしなくなった」と述べている。

以上の発言は、アンケート調査の「活動を通して得た力」における「愛大学生コンピテンシー」の項目の中で高い値を示していた「目的の達成のために多様な人と協働すること」を支持するものであることが窺える。活動のプロセスにおいては、日常の友人との「心地よい」コミュニケーションとは異なり、物事を進めるために、立場や価値観の異なる他者と意思疎通を図ることが求められる。複数の1回生

が、他学部の学生や社会人との関わりから得る刺激や気づきの多さについて指摘していることを踏まえると、活動開始当初は他者と異なることに気づき、戸惑いや刺激を感じながらも協同を重ねる中で衝突や共感等の経験を増やし、やがて多様な他者との関わりに対しての抵抗が少なくなると共に、関わっていく技能が備わることが推察される。

もうひとつの「身についた力」には、目的・目標および団体のミッションに基づいた行動がある。インタビュー調査の中では、ミッションについて3カ月間に渡り議論が行われたことや、「目的・目標を意識するようになった」、「目標達成のために段階ごとに分けて考える思考力が身についた」などの発言が得られた。ICOに所属する2回生の学生は以下のように語っている。

最初は自分が留学生と楽しんで交流することしか考えていませんでした。でも先輩たちがいつもICOのミッションである「日本人と留学生の橋渡しになる」ということに立ち返って、来てくれている人が楽しめているかどうかを大事にしているのを見て、参加者それぞれが楽しめているか、どうしたいかを気にかけて行動するようになりました。(2回生女子)

SCVでは、年度始めの全体研修において、各団体がそれぞれのミッションとバリューを確認(必要に応じて改定)し、それに対応した年間目標を設定している。また、年間目標を達成するための個々の活動やプロジェクトも、それぞれに目的・目標が設定され、すべて一貫性が保たれるように年間の活動がデザインされる。それゆえに、ミッションと目的・目標は活動の指針として、企画立案から実施までのプロセスを通して語られるものであり、重要なものとして学生の中でも位置づけがなされていることが窺える。また、組織の存在意義を意識しながら活動することが、所属意識や自己の役割について考えさせることを促しているのではないだろうか。このことは、アンケート調査で高い値を得たもう一つの項目である「他者および集団・組織のために役立とうとすること」を支持するものであると推察される。

2. SCVの活動と大学生活全体の結びつき

SCVの活動と大学生活全体の関連性を示唆するものとして、SCVで身につけた力をどのように活用しているかの質問への以下の回答を取り上げる。

僕はコミュニケーション力と自分に対する自信が身につきました。…他のボランティア活動に参加した時、発言したり提案したり、人と関わる時、SCVの活動で身についた力を実感しました。授業では、グループになって簡易的なプロジェクトを進めることがあり、自分から『こうすれば』と提案したり、発表する際に人から頼まれることがよくあります。…バイトの時、後輩ができた時、相手の立場に立って、『この子は何がわからないか』を考えて教えることができるようになりました。(4回生男子)

この他にも、2回生の女子学生から「グループワークのある授業で他のSCV生を見ることがあるが、多くの人が積極的に意見交換し、その場をファシリテートし発表している」といった発言が聞かれた。本インタビュー調査では、SCVのミーティングにおいて、一つのことについても全員が参加して十分な議論をすることや、団体を越えて助け合いが起こることを複数の学生が指摘していた。そのような経験を繰り返す中で、話し合いの場や他者に対する責任感が養われ、SCVの活動以外の場面においても、自発的な行動が生まれるのではなかろうか。

SCVの活動が学生生活全体の充足感につながっていることを示唆するものとして、障がい学生支援に携わる学生(2回生)の発言がある。

ボランティア活動なので「大勢の中の一人」になると思っていたが、手話の能力を身につけ、検定を受け、ある全国大会で大勢の前で手話を披露した。自分に自信が付き世界が広がった。…高校までは成績でしか自分のことが評価されなかったが、課外活動が評価されていることが嬉しい。(2回生男子)

また、複数の学生が、他のSCV団体や学外の組織が主催する多様な活動に参加できることをSCVに参加する利点として挙げており、「スケジュールが埋まるのが嬉しい」、「活動も授業も頑張れていることで充実している」と述べている。

3. キャリアとの関連性

キャリアとの関連性について、特徴的だった発言は、入学時に就職活動や就職後のことを考慮してSCVに参加することを決めたとするものである。ある学生は国際関係の仕事に就くことを希望しているためICOに参加することを決断している。別の学生は「ビジネスの世界で活躍するために、企画から実施までのプロセスを学びたかった」と述べている。理学部に所属する2名の学生は、理系学生に足りないと言われるコミュニケーション能力を養うことで「バランスの良い人間」になりたいと思ったことを参加理由として述べた。いずれも理想とする将来の職業人としての自分に必要な資質能力の中で、正課授業やその他の活動では得られないと予測されたものを補うためにSCVの活動に参加していることが窺える。このことはキャリア意識の高さに関連づけられるのではなかろうか。

5. まとめ

本研究では、アンケート調査とインタビュー調査を通して、主に以下の2点が確認された。

まずは、ピア・サポート活動を通じて「目的達成のために多様な他者と協働する力」と「他者および集団・組織の

ために役立つとする力」等、愛大学生コンピテンシーで示されている資質能力が養われている点である。これについては、先行研究（寺本ら、2007；日本学生支援機構、2010）の結果を追認したものであると言えよう。杉村ら（2006）は、ピア・サポート活動における主体性経験の意義として、活動を維持する動機付けの向上と学生の心理的発達を挙げているが、SCVでの活動は年間を通じた自団体での活動だけでなく、SCV全体研修や毎週のミーティング等、様々な場面で主体性を求められるという点で動機付けを高め、学生の成長をもたらしている可能性があると言えるのではないだろうか。また、ルーティン化した作業をこなすのではなく、学生自らが学生生活へ抱く不満や問題点からその都度支援内容を考えるという活動プロセスそのものが、活動の「自分ごと化」を促し、学生の主体性の経験につながっていると考えられる。

次に確認されたのは、ピア・サポート活動に参加している学生は大学生生活全体にも充足感を感じているという点である。インタビュー調査においては、SCVで学んだことを正課の授業で活用していることや、活動と学習をバランスよく行っていることに充足感を感じていることが複数の学生の発言から確認された。また、複数の学生が「SCVの学生は遊ぶ時は遊び、やる時はやる」という表現を用いていたが、授業に参加しながら、その他の活動や遊びにも時間を費やすことが「知識・技能」の習得につながることもからも（河井ら、2011）、バランス良く生活できている自己への信頼感や、活動を通して得た力を活用することで得られる有能感が充足感をもたらしていることが示唆される。このことは、大学生生活全体の質向上に寄与している可能性が窺える。

6. 今後の課題

以上、体系的ピア・サポート活動の教育的効果と大学生生活全体の質向上との関連性について検討をしてきたが、本研究における調査対象者は、アンケート調査においても9名と少数であるため、このことが結果に与える影響は、課題として残されている。また、活動から離脱する学生についての分析や、通常のサークル活動との比較など、より多角的・包括的な視点から捉えていくことも重要と思われる。

その他の限界として、ピア・サポート活動への参加意識が高い学生が元々持つ特性を考慮していない点がある。西本（2011）は、その特性として、「大学生生活において活発」、「主体的に授業に取り組む」、「活動に付随する金銭でなく他者との交流や成長などを重視する」、「将来就きたい職業が決定している」を明らかにしている。本研究においては、学生の活動参加前の状況について、詳細には尋ねていない

ことから、結果の一般化には慎重でなければならない。

今後は、学生個々人の背景、学習経験、生活パターン、所属組織、さらには青年後期の発達段階などを考慮した上で、それらにピア・サポート活動が加わることで生じる変容過程や成長のダイナミクスを明らかにすることが求められる。

注

- 1) 日本学生支援機構が2010年に実施した調査によると、調査対象の518プログラムの内、352のプログラム（68%）が2005年以降に実施開始している。

謝 辞

本調査にご協力いただいた学生のみなさまにこの場を借りて御礼申し上げます。

参考/引用文献

- 河井亨・溝上慎一（2011）「実践コミュニティに足場を置いたラーニング・ブリッジング-実践コミュニティと授業を架橋する学生の学習研究-」大学教育学会誌、33(2)、124-131.
- 川島啓二（2010）「学生支援の現状と課題-学生を支援・活性化する取り組みの充実に向けて-」日本学生支援機構学生生活部『学生支援の現状と課題-学生を支援・活性化する取り組みの充実に向けて-』大学等における学生支援取組状況調査研究プロジェクトチーム中間報告書（pp.109-118）
- 西本佳代（2011）「誰がピア・サポートをするのか」大学教育学会誌、33(1)、130-136.
- 小貫有紀子（2011）「ピア・サポートの現状と課題-ピア・サポートの拡大と多様化」日本学生支援機構学生生活部『学生支援の現代的展開-平成22年度学生支援取組状況調査より』大学等における学生支援取組状況調査研究プロジェクトチーム報告書（pp.63-77）
- 佐藤浩章（2012）「FDへの学生参加の意義と課題」、『学生・職員と創る大学教育-大学を変えるFDとSDの新発想（清水亮・橋本勝編）』、ナカニシヤ出版（pp.40-50）
- 清水亮（2012）「大学は変わったのか」、『学生・職員と創る大学教育-大学を変えるFDとSDの新発想（清水亮・橋本勝編）』、ナカニシヤ出版（pp.2-13）
- 杉村和美・小倉正義・加藤大樹・松岡弥玲・山田奈保子（2006）「ペア相談と学生の主体性を取り入れた大学でのピア・サポート活動」青年心理学研究、18、51-62.
- 寺本憲昭・伊藤昭・伊藤則男・中村成夫（2007）「学生活動の効果検証-オリター活動（上級生による新入生支援組織）をケースに-」大学行政研究、2、133-146.
- 山田剛史（2012）「学生の学びと成長を捉えるために不可欠な入学者調査」、『Between』進研アド、2-3月号、12-13.
- 山田剛史（2010）「ピア・サポートによって拓かれる大学教育の新たな可能性」大学と学生（日本学生支援機構）、第87号（通巻561号）、6-15.